

110 明治13年10月25日 菊池長閑宛

(長閑注記)

日々電信の返事を待共未た音沙汰なし勘考せらるゝ最中と推察此間於波よりも何か申上たる由なるか私一文なしにて帰朝したれハ仮令今帰県出来るものにしても道中銭のみにてハ旅立ならす恐入たる次第なから少く共今百円ハ送て頂きたし体一つにて帰たれハ頭から尻まで万事新規に求ねハ成らぬから銭の入用か多くて溜らない飯食種に有付事か極るまでハ帰県なり難く夫迄の雑用もなくて叶す於波一件ハ私引受る積り若登京せらるゝならば向の都合に依着京せらるゝ迄延す事もあるへし於波ハ小川町に居事心から嫌なり何れ出た上ハ那珂に預る積三十円ハ着次第鍵屋より請取へし

明十三

武夫

十月廿五日夜

父君

(長閑注記)

「十一月一日午後着 同三日返事出し」